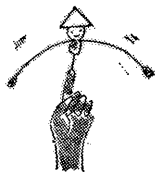


子どもの生きがい



塚田幸子

砂場で、石ころを見つけると、それを手に取って、ズズッと砂の中に埋めて行き、まだ少しのぞいている石ころに両手で砂をかかけたい。そうに両手でたたくて無心に遊んでいる一歳九ヶ月の私の娘……私は、ある日発見したこの遊びを感激をもって見つめていました。それ以来、何度も繰り返されるこの遊びは一体何を意味しているのでしょうか。固くて丸いなめらかな、手の内に収まるほどの石ころ……心の中というものを、ふと私は感じたのです。まだ心の外も内もないように混沌とんと思われる小さな赤ちゃんだった娘も、こんなに立派に成長したのです。ちゃんと心の中に核のようなもの、中心のようなものをもった一個の人格を私は感じていました。

この場で、私は、子どものこの遊びに積極的に加わっていないことに気づきました。このことは、裏を返せば、その時、私が、この遊びにもっと深く加わりたいと思ったということでしょう。そして、この遊びは実際、加わることでできないものだったのです。それは、私が前述のように感じた理由によるのだと思います。その遊びは、同じように外形的には真似られても、到底その内容までは真似ることのできない、子ども自身のもの、というよりむしろ、子どもそのものだったからです。

この遊びをこの子の成長の流れの中でとらえようとする時、こ

れ以前に見られたことは、やっとひとりで歩けるようになって、家の外を歩きまわり始めると同時に、拾った石ころを両手に握りしめて歩いたり、手にさげたかごに重たいほどいろいろな物を入れて持って歩いたりして、家の中で持ち帰るといことが、しばしばあったことをあげずにはいられないでしょう。直立歩行を始めたばかりのあの頼りなき、不安定さを補おうとでもするかのよう、安定感を与えるより所となる固い石が選ばれるのでしようか。大人の目から見れば、ただの美しくもない石ころであったり、プラスチックのかけらであったりするので。けれども、子どもにとってははじめての出会いなのでしょう。はじめての物やはじめての人というものは、大人にとっても、特別の驚きや発見を伴う体験をもたらすものなのですから。

思いかえせば、それ以前では、手に触れるものを何でもたちまち口に入れ、あらゆるものを口の中の触覚や味覚で理解しようとしている時代（時期と言ったほうがよいでしょうか）がありました。この時も、それなりに驚きや発見のようなものがきつとあったと想像することはできますが、今、それをたしかめることは、もう、私にはできません。

子どもの砂に石を埋める遊びが、母親である私にとって感激的だったことは、ずいぶん意味深いことのように思われるのです

が、ひとりで歩けるようになってからの石ころとの出会いをそれ以前に見ることができたのと同じように、その後の子どもの変化を見てみますと、周囲の大人が、この子の言葉の発達を特に強く感じて一様に指摘していることに代表される心的なものの発達をあげることができるよう思われます。

心的なものと言ったのは、身体に対しての心という意味もありますが、ただ単に言葉の発達だけでなくもっと広い意味での成長や発達としてとらえたいと私が考えているからで、言葉だけに限っても、単語が数量的に増加したというだけでなく、文章のような表現が、母親にしかわからないような形ではあっても数多くあらわれてきて、たとえば、母親からは「これなあに？」と言って、「○○」と単語を答えてもらうだけでなく、「これは○○よ」とか「ああ、あれは△△ね」と答えてほしいとか、「チカちゃん、ドウモ」と言って、自分では「チカちゃんにこのオモチャをもらってどうもありがとうと言ったの」という内容を表現したつもりで、それに対してはオウム返しに「チカちゃん、ドウモ」と言われたのでは不満で、「そう、それはチカちゃんにもらったのね」と言ってもらって満足するというようなことがあるのです。

また、このころから、次第に子ども同士で、つまり友達と一緒に遊びたいという欲求が強くなってきて、それぞれが同じ種類

のオモチャや遊具で遊んでそれぞれが楽しいという経験を多く持つようになってきています。たとえば、公園で、誰かがブランコに乗っていれば自分もブランコに乗り、ひざに抱かれて乗っていれば、母のひざに抱かれて乗りたがる。誰かが砂場でミニカーを使つて遊んでいれば、自分も家からミニカーを持ってきてその近くで遊び、ボールで遊んでいる子がいれば、自分もボールを持ってきて投げてみるという具合に。同じ一つのオモチャや遊具を共有して遊ぶところまではいかないけれど、ほとんど同時に、すぐ近い場所でも 同じような遊びを各々でやるだけで、ひとりで遊ぶよりも何倍も楽しいのです。時には微笑を交わし合ったり大声で笑い合ったりすることすらあるのです。

この先、まだまだ成長、発達していく子どもたちですが、外から見ている母親が感じる喜びと同じくらい、またそれ以上に、この成長の喜びを感じて子どもは生きていくのでしょうか。

子ども同士が微笑し合ったり、母親が子どもに微笑を投げかけたりして、喜びや祝福された感覚を積み重ね学んでいくことは、(悲しみや苦しみももちろんありますが) 取りたてて言うほどのことではなく、ごく当り前のことですが大切なことに思われるのです。

私たちは誰でも、誰かといっしょになら楽しい仕事ができると

いう経験があるのです。もちろんひとりでできなければならぬこともありますが、誰かと共に何かをするということが、人間にとつていかに大切な、いかに楽しい、言い換えれば、生きがいのあることかということが、こんなに小さいうちから、いいえ小さいからこそ、人と共にするということにならわれているのでしょうか。

また、子どもは動物をとても好きだというのが普通ですが、このことも、人間にとつて動物や植物あるいは無生物でさえも欠くことのできない大切なものだということをそのままにあらわしているのでしょうか。それらと共にあってこそ生きる意味があるので。子どもと共にいると、一見平凡で、見失いがちなこのように、ことに数多く気づかされるのです。子どもは本質的な生き方をそのままにしているからでしょう。大人の求める生きがいも子どもに照らしてみたらためて気づかされるものようです。

(お茶の水女子大学大学院)